

女
性
と
美

綾

哲

一

女性と美

- 一、男子は女子に美を求める
- 二、価値としての美
- 三、美は主観的である
- 四、女子の美醜と結婚及び就職
- 五、既婚婦人の美と幸福との関係
- 六、女子と職業、資格及び能力
- 七、公務員の心得
- 八、女性の美は心の美

女性と美

綾 哲 一

本稿は私が県庁の三十五才から四十五才までの女子職員（うち約半数は未婚者または未亡人）に話した講話の原稿を修正したもので、純粹の學術論文とはいいたいが、公職についている卒業生たちのために、何か役にたてばと思つて掲載したのである。

一、男子は女子に美を求める

詩人、与謝野鉄幹の「人を恋うる歌」に、「妻をめとらば才たけて、顔うるわしく情あり、友をえらばば書を読んで、六分の俠氣四分の熱」とあるように、とかく男性は女性に対して美を求める傾向がある。第一表は私が宮崎市内の某百貨店及び主要な商店、会社などに勤めている勤勞女子青年、全男子青年、及び宮崎大学の男女学生に対して、「あなたは結婚の相手としてどのような異性を選びますか」という質問紙をわたして、自由に記述してもらい、これを統計したもので

第1表 青年男女の結婚の条件

群 別 順位と%	労働女子青年		女子大学生		労働男子青年		男子大学生	
	順位	%	順位	%	順位	%	順位	%
経済力、生活力	1	41.8	1	49.3				
健康	2	41.4	2	30.0	2	30.0	1	40.2
誠意	3	24.8	4	17.3	6	7.5		
容貌	4	13.3	19	3.3	1	40.0	2	37.3
ユニモ	5	11.9	13	5.3				
寛大・思いやり	6	10.0	3	18.7	3	10.0	3	18.4
明朗	7	8.6	7	12.0	6	7.5	4	16.1
やさしい	8	8.6	9	9.2	3	10.0		
愛情	9	5.7	6	13.3			12	4.1
理解・協力	10	5.2	5	15.3	10	5.0	9	6.2
教養・学歴	11	5.2	9	9.3	16	2.5	6	12.9
男性	12	4.8	23	2.7				
頭脳明析・知性	13	3.3	8	10.7	3	10.0	5	15.9
サラリーマン	14	3.3	33	1.3				
頼り	15	2.9	12	7.3				

ある。これは勤勞女子青年を中心として調査したので、順位や%は勤勞女子青年の順位によって列べてあり、他はこれと比較するために列挙したものである。これによると、勤勞男子青年は女子の容貌容姿を結婚の第一条件におき、男子の大学生は健康について容貌を第二位においているが、これに対して勤勞女子青年は、男子の容貌容姿を第四位におき、女子大学生は第十九位において、殆んど男子の容貌を問題

にしている。

第2表 配偶者選択における容顔の地位

調査要項	被験者		被験者	
	大学生 男 160名	小中高 男 70名	大学生 女 55名	小中高 女 132名
性 格	1	2	1	1
健 康	2	1	2	2
容 貌	3	4	9	7
頭 脳 及 学 業 成 績	4	3	3	3
遺 伝	5	6	4	6
学 歴	6	7	5	5
体 格	7	5	8	4
趣 味	8	10	6	8
両 親 の 健 否	9	8	12	12
家 庭 の 経 済 状 態	10	12	7	11
両 親 の 意 向	11	9	9	9
近 隣 の 評 判	12	11	11	10
父 母 の 社 会 的 地 位	13	13	14	14
ス ポ ー ツ	14	14	13	13
媒 酌 人 へ の 義 理	15	15	15	15

第二表は私が某大の男女学生及び宮崎市内の小中高の先生の配偶者選択に、五項目の条件をあげて、これら重要な順位の順

位に列らべてもらったものである。これによると、男子大学生は性格、健康について女子の容顔を第三位におき、小中高校の男子の先生は、健康、性格、頭脳及び学業成績について第四位に列らべているが、これに対して女子大学生は男子の容顔を九位におき、小中高校の女の先生は七位に列らべている。また私が宮崎女子短期大学生に、「理想の男性としての条件を十二項目あげて、重要さの順位に列らべさせたのが第三表である。これによると、女子は男子の性格を最も重視し、容顔は第七位であった。

以上のように配偶者の選択については女子の方が男子より実質的、功利的で、より健実である。男子のように容顔容姿だけに迷うものは

第3表 理想の男性としての条件（重要さの順位）

科, 学年	性 格	身 体	職 業	月 収	学 歴	頭 脳	容 貌	家 庭	思 想	家 柄	宗 教	そ の 他
保育 1 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
保育 2 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
初教 1 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
初教 2 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
国文 1 年	1	2	3	4	5	6	7	9	8	10	11	12
国文 2 年	1	2	3	4	6	5	10	8	7	10	11	12
平均順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

少い。これに対して男子は一般に女子の色香に迷うものが多いことがわかる。

二、価値としての美

すべて人間は食べるだけでは満足しない。必ず価値を求める。では価値とは何か、それは論理的価値としての真、道徳的価値としての善、審美的価値としての美、宗教的価値としての聖である。この外にシュプリンガー (Spranger) のように、経済的価値や社会的価値、政治的価値などを

認める学者もあるが、一般的にはむしろ真善美の三つだけをあげている。宗教家は価値の中で、聖を第一とし、真善美は聖にいたって最高の域に達すると主張する。しかし、世間には信仰をもたぬ人が多い。また形式的には仏教であり、キリスト教であっても、真の信仰はもっていない人がさらに多い。そこで、ここには真善美だけをとりあげて見よう。それでもスペンサー (Spenser) のような学者は美を軽視し、美的方面は人生の要求の中で最も末のものであるとした。

しかし、人は他の要求が満たされた後に、はじめて美的方面の要求を求めてよいというものではない。例へば裏長屋に住んでいても、人間として一生を送る間には機会の許す限り美的趣味をもち、美的享樂をうけて人生を送ることはよいことである。人生にはいろいろなことをよく知っているとか、何も知らないというような知的評価もあれば、朝から晩までよく働らくとか、怠けもので仕方がないとか、真面目であるとか、不真面目であるとか、というような道徳的評価もあるが、面白いか、おかしいとか、きれいだるとか、立派である、というような美的方面の評価も多い。

まだ希望するだけの貯金ができていないから美的享樂など考える暇がないとか、まだ入学試験に合格していないから、合格するまでは面白くも、おかしくもない、というものではない。事実、人は子供のうちから面白いもの、おかしいもの、美しいものが好きである。

私なども師範学校の入学試験前に、親にかくれて、三里の道を汽車に乗って、町へ島村抱月、松井すま子のカチューシャの芝居を見に行つたことがある。両親からは大変叱られたが、これを聞いた同じ受験準備中の友達が大いに羨やましがつたことを覚えてゐる。殊に今の学生たちは本務の學業を忘れて音楽会や展覧会に行き、観劇に夢中になるものも少くない。もっとも昔は文学や美術は貴族の専有であつたことも事実である。紫式部や清少納言は官人であつたし、ギリシャやローマでもみな貴族階級の人であつた。しかし今は国民的美術や大衆文學の時代で、苟くも人と生れたからには何らかの美的趣味を求めているし、またそれを与えてやるのが当然である。

そこでこれを一応歴史的に通観してみると、ギリシア時代は体育と美育が教育の二本柱であつた。次いで中世は信仰の時代で、美育は概ね宗教に奉仕した。中世の美術は仏像や仏画であり、キリストやマリ

アの絵、彫刻などで、音楽は讃美歌や御詠歌が主であつた。しかし、これにあきたらず所謂文芸復興時代となつて、ギリシア、ローマ時代の文化に帰えろうとする運動が起つた。宗教改革時代は再び中世のよくな禁欲、節欲の時代となり、十八世紀の理性主義、合理主義時代には文學美術を樂しむというよりも算盤勘定を第一として、経済的な利益をあげることに一生懸命であつた。それが十八世紀の末葉から十九世紀の初頭にかけて新人文主義が台頭し、大いに美育が勢力を挽回してきた。その代表者はシルレル (Schiller) である。これに対して一応、反動時代があつて、十九世紀の終頃から二十世紀にかけてまた美育が大いに唱導されるようになり、新人文主義とは違った意味で、一般の人々に文芸や美術の趣味を与えるべきであるという芸術教育運動が起つてきたのである。

新人文主義、特にシルレル (Schiller) などによると、美育の中に一切の教育がはいってゐる。即ち美育は教育の理想であるといふのである。プラトーン (Platon) などともこういう考えであつたようである。即ちわれわれが美であるとするものは、そのもののイデー (Idee) をよく現わしているものが美である。走っている人を描いた絵であれば、走っている人間というイデーをよく現わしている絵、走っている人間という觀念を具體的に形によつてよく現わしているものが美である。われわれが認める美は、そのものの觀念を最も円満に形の上に現わしているから美と評價するのである。そして觀念というのは知的のものであるから、まちがっているものは正しい觀念とはいえない。したがつて眞の美は正しい觀念を代表しているから知と美は一致し、一体となるのである。

次に道徳もこれと同じである。道徳上、善といふことはこれを美的に見れば立派な行い、即ち美的行いといふことになる。立派な行いは

称讃すべきもの、称讃に価するものは美なる行いである。それ故、道徳と美は矛盾しない。ただ美と善と真の違ふところは、真といえは抽象的に物を見る側からいい、美といえは具體的のことである。道徳といえは規則に従い、窮屈にして行くことを意味する。美は規則に拘泥しないで、自ら喜び進むということを意味する。道徳と美とは別のもではないが、一般の真理に個人が服従して行く、「こうしてはならない」という規則の下に、個人個人の行いを服従させていくというのが道徳である。美は個人個人の中に一般の法則を現わして行くのであるが、それも個人個人が自ら喜び進んで一般の原理を身に現わして行くことである。それ故、美と善とは矛盾するものではない。同じ原理を現わすのであるが、道徳はそれを外から抑えつけられるものとして、幾分いやいやながらやるという意味をもつ。美は自ら進んで正しい原理を現わして行くのである。道徳は、どちらかといえ抑えられる性質のものであるが、美は自ら進んで行く性質のものである。故に道徳は苦しい仕事であり、美は楽しい仕事である。こういう風に見て行くから総てのものは美という状態にいたって、その理想的な状態に達する。それ故、美は一切を包含して、しかもそれら一切を理想化したものである。故に美育は教育の終局であり、教育の理想であるといふことになる。

しかし、美の概念は次第に変わってきた。十九世紀末から二十世紀にかけての思想界は、ギリシアや新人文主義時代のように、美を窮屈には考えない。美ということは美しいと認めることである。しかし、美しいとか、面白いとわれわれが認めるものは真理でなければならぬとか、道徳とその内容を一つにしなければならぬという制限をおくべきものではない。美とは主観に氣に入ること、自分の氣に入つたものならば、如何なる内容をもつておるものでも美は即ち美である。内容

が道理にあわなくても美の値うちは消されない。事実、小説などは、その多くはフィクションであり、つくりごとであるから真理とはいえない。また道徳に背いた行いでも、それが美しいと思えるなら美として値うちがある。お染久松の心中などは、決して感心した道徳的行為ではない。しかし読者がこれを読んで感激し、その劇を見て感動するならば立派な美である。千葉命吉氏が「お染、久松の恋と楠木正行、弁の内侍の恋を比較して、同じである。」と主張して、某師範学校付属小学校主事を辞任しなければならなかったのは時勢が悪かったからである。美は美そのもののためにあるので、他のものとは関係はない。たとえ不道徳のことを書いても読者に面白いという美的享樂を与えるならば、それは美である。美と善とは二つの異つたカテゴリー（範疇）に属する心的評価であるといふのである。

しかし全く関係がないのではない。如何にも感心すべき行いである自分と感心する行いはその人には善行とせられる。また美なる行いは面白いと自分で感心する行いである。

それ故、自己が感ずるという点から言えば美に感ずるも、善に感ずるも同じである。感ずる主体が同じであれば、その人が善または美とせられるものの間に何らか共通の点があることは自然の理である。芝居を見ても武士気質の人、律義な人は滑稽な芝居を見ても面白くない。

また義理に反した芝居を面白いとは思わぬ。滑稽な人は喜劇を喜んで悲劇を喜ばないし、悲観的な人は悲劇を喜んで喜劇を喜ばない。この点、女子が悲劇を好むのは、女子が悲境に立つ場合が多いからではあるまいか。それ故、個人の持っている性格に従って、その人の精神状態と、美もしくは善と感ずるところには何らかの共通点があるのは当然である。したがって、事実としては個人が美と判断することと善と判断することとの間に共通の要素もあり得るが、理論としては二つは

全く別のことであると見るのが正当である。この故に、やはり美育は教育の全体を被うものではなくて、教育の一部分であるというのが今日の芸術教育論である。したがって人には真善美（聖）が相列んで同様に尊重さるべきで、上下の区別はつけられない。しかしこれら総てを円満に調和的に教育するのが玉川学園長小原国芳先生の全人教育であり、またペスタロッシー（Pestalozzi, J.H.）の教育理想でもある。

三、美は主観的である

然るに人々は何故、女性に対して特に美を求めるのか。世の男性たちは女性をかざりもの、あるいは自分の大切な持物と考えているのではないであろうか。もしそれならば大きな間違いを侵しているのである。尤も美は感情と関係が深い。感情は外界の事物が人の心に与えた状態を反映する意識体験である。花が美しいというのは、その花のもっている客観的な性質ではなく、その時、その花がその人の心に与えた内部的な影響を反映したものである。それ故、同じその花を、ある人は美しいといい、ある人は見るのもいやだという。それで感情は主観的主観といわれる。私は来客を案内してよくホテルフェニックスや観光ホテル、神田橋ホテルなどに行くことがあるが、その際、沢山の新婚夫婦に逢うことがある。私が不思議に思うのは、立派な青年がどうしてこんな女性を好きになったのかと思うような不美人を連れて、いとも親切に世話をしているのを見るし、その反対に、美しい花嫁が、何とも知れぬおかしき青年を夫として、さも楽しそうに手を組んで帰えってくる。つまりこの美しい花嫁には、こんな醜男子が誰にもかえがたい男性に見えるのであろう。またさき的美青年には、このような醜女が世にも美しい女性に見えるのであろう。それで男子に残る人も少なければ、女子に残る人も少いのである。美醜好嫌は主観的主

観であるから人によって見方が違うのである。私なども客観的に見れば妙な女性をもらった方であるが、けっこう満足しており、近年とみに病弱になった妻の世話をしながらも後悔はしていない。

私は昔の高等女学校校長を十一年も勤め、工業専門学校や男子師範では男子の学生を教え、高等学校や大学では男女共学で十五年も勤め、現在は女子短期大学で、もう九年目になるが、女子を長年教えてつくづく思うことは、男子の幸福は良くも悪くもみな自業自得であるからそれでよいが、女子の幸福は殆んど夫の業績に左右されるということである。しかもそれは結婚というただ一回の機会によって決まるのである。それ故、女学校を主席で卒業したような優等生が早く未亡人になって苦労したり、夫の不業績から没落して同窓会にも出られないようになったものがあり、その反対に、在学中おしゃれで困っていたような子が良家の奥さんになって、婦人会やPTAの花形になって活動しているものも少くない。それ故、女子の幸、不幸は学校の成績よりも容貌の美醜や人扱いの良否によることが多いように思われる。また女子は「あなたは学校時代に成績が良かった」といわれるよりも、「あなたはきれいだ、お若い、美しい」といわれる方を喜ぶのもこのためであろうと思う。

四、女子の美醜と結婚及び就職

そこで私は女性の美醜と結婚及び就職との関係を調査したのである。第四表は某高等女学校卒業後十年を経過した某学級の女子につき、これを元担任の先生及びその学級の学科を担当した四人の先生に依頼して、容貌の最上と最下を一割ずつとり、次に上と下を二割ずつとり、残り四割を普通として五段階に分けたが、内死亡者が三名、不明が二名、病気が一名あったので、調査の対象は四十四名となった。これら卒業生の結婚状況を調査したところ、最上と最下は全員結婚して

第4表 容貌と結婚及び就職との関係

調査事項 容貌	調査人員	調査対象	結婚者数	結婚の率%	離婚者数	離婚後の状況	現在の就職者数	就職の率%
最上	5(内不明1)	4	4	100	0		0	0
上	10	10	5	50	1	在宅	4	80%
普通	20(内死亡3不明1)	16	8	50	1	小学校教員	4	50
下	10	10	3	30	(1)	三度結婚して現在は幸福	7	100
最下	5(内病氣1)	4	4	100			0	0

いて一〇〇%、上と普通は五〇%が結婚しており、下は三〇%が結婚していた。思うに容貌最上のものはいろいろ文句を言っているが、希望者が多くて結局全員結婚したのである。これに対し、最下のもので、苟くも高等女学校を卒業している以上、一つや二つは縁談があった筈で、その際、「自分のようなものを選んでくれた」ことに感謝して、結婚についての諸条件に文句をいわずに応じたため全員結婚できたのであろう。その他のものは自我水準が高く、縁談があっても、もっと良縁がある筈だと高望みをしているうちに機を逸したものだと思われる。次に離婚の欄を見ると、最上と最下には離婚がなく、上、普通、及び下に一人ずつあり、特に下の一人は三度結婚して現在幸福であるという。普通の一人は小学校教師になり、上の一人は家にいて家事を手伝っている。未婚のうち上は八〇%、普通は五〇%、下は一〇%就職しており、これらの人は小中高校の教師、看護婦、会社員などで、その多くは就職のために上級学校に進

第5表 女子の容貌と幸福度との関係

容 貌	幸福度	非常に幸福	幸 福	普 通	不 幸	非常に不幸	計	幸 福 点	標 準 偏 差
最上	12	8	1	4	1	26	4.00	1.21	
上	9	23	11	4	4	51	3.77	1.13	
普通	6	27	17	14	2	66	3.32	.98	
下	4	13	3	0	1	21	3.15	1.15	
最下	1	6	0	1	0	8	3.88	.78	
計	32	77	32	23	8	172	3.59	1.03	

$r = .241$ 有意差 最上と普通 $.11 > P > .001$
 最上と下 $.01 > P > .001$
 上と下 $.05 > P > .02$

と、容貌最上のものの平均

これによる
 のが第五表で
 関係を示した
 と幸福度との
 容貌の五段階
 夫人たちの幸福度を決め、

学して資格をとったものであり、所謂結婚長期戦の構えと思われる。
 五、既婚婦人の美と幸福との関係
 次に女性の美と幸福との関係を調査するために、既婚の婦人一七二名(うち一〇二名は私の媒酌によるもので、その他は大学教官の夫人及び親しい知人の家庭)について、私ども夫婦と懇意な夫婦二組の計男女六人で相談して、各夫人につき容貌を最上、上、普通、下、最下の五段階に分ち、次にそれら夫人の(1)夫の地位、(2)収入及び財産、(3)夫婦の和合、(4)家庭内の人間関係、(5)子供の状況、の五項目を考慮して本人の幸福度を、非常に幸福(五点)、幸福(四点)、普通(三点)、不幸(二点)、非常に不幸(一点)の五段階に分ち、前記

第6表 女子の容貌と家庭の良否

容 貌	上 の 家 庭	中 の 家 庭	下 の 家 庭	計	家 庭 点	標 準 偏 差
最上	20	6	0	26	2.77	.42
上	36	13	2	51	2.68	.55
普通	34	28	4	66	2.45	.61
下	15	5	1	21	2.64	.56
最下	2	6	0	8	2.33	.44
計	107	58	7	172	2.58	.57

○=.333 有意差最上と最下 $P<.001$

〃 最上と普通 $.02>P>.01$

有意差なし上と最下 $.1>P>.05$

次に容貌と家庭の良否との関係であるが、これは家庭を上中下三段階に分ち、家庭点を上三点、中二点、下一点として、両者の関係を現わしたのが第六表である。相関係数は・三三三で、系数による順位は最上、上、下、普通、最下となっており、容貌最上と最下、最上と普通の間には有意の差がある。

幸福点は四点で第一位、次は最下が三・八八で二位、上は三・七七で三位、普通は三・三二で四位、下は三・一五で五位となっている。相関係数は最下が二位になったため・二四一に過ぎないが、各段階間の差は危険率・〇五乃至・〇一以下で有意の差を示している。ここで問題になるのは最上が一位で、最下が二位になっていることである。思うに容貌最下の人は「夫が自分のような不器量なものと結婚してくれたい」とに感謝して、終始夫に対するサービスがよいためであろうし、第二にはこのような女性を苦情もいわずにめとる男性は、それだけ人柄がよいのであろう。その他の段階は幸福度が大体容貌の順位になっている。

次に顔形と幸福との関係について、顔形を丸顔、普通、長顔の三つに分

ち、幸福点は第

第7表 女子の顔形と幸福度との関係

幸 福 度	非常 に幸 福	幸 福	普 通	不 幸	非常 に不 幸	計	幸 幸 点	標 準 偏 差
顔形								
丸顔	8	27	13	4	2	54	3.65	.95
普通	15	34	16	9	4	78	3.60	1.08
長顔	9	16	3	10	2	40	3.50	1.22
計	32	77	32	23	8	172	3.58	1.08

$r=-.085$ 有意の差はない。

第九表は、肥満、瘦身と幸福度との関係を示したもので、幸福度の順位は、第一位肥満（三・六七点）、第二位普通（三・六一点）、第三位瘦身（三・四二点）で、各段階の間には有意の差はないが、系数的には肥えている方が幸福度が高くなっている。これらを総合すると、丸顔で、背が低く、よく肥えている人が幸福度が高いことになり、一般人の常識とは逆になっている。昔の美人は瓜ざね顔で、背の高さは普通、柳腰のひよろした女性とされていた。これに反して私の調査では丸顔（お多福）で、背が低く、肥っている人の幸福度が高

差が認められる。この場合、高いを三点としたため、相関係数は負数になっている。

五表の通り五、四、三、二、一点として計算したのが第七表で、系数的には丸顔の幸福度は三・六五で第一位、普通は三・六〇で第二位、長顔は三・五〇で第三位になっているが、相関係数は・〇八五で、各段階間に有意の差はない。

第八表は身長と幸福度との関係を見たもので幸福度の順位は、第一位低い（三・七八点）第二位高い（三・七五点）第三位普通（三・二一点）で、高いと普通、低いと普通の間には、それぞれ有意の

い。こういう人は一般に健康であるからであろう。それ故、肥満を恐れて食量を減したり、昼食をやめたりすることは、おかしいことで、そのためにエネルギーが不足し、仕事の能率もあがらぬであろうと思われる。また昔は背の高いのは大女としてむしろ嫌われていた風があった。被験者はみな相当の年令故、その頃、結婚していることも考慮に入れなければならぬ。現在は服装が概ね洋服に変わったので、むしろ背の高い、脚の長い女性が選ばれるようになってきている。容貌容姿も時代によって見方が違ってくるので、背の高い人も悲観する必要はなく、むしろ誇ってよい時代になったと思う。

第8表 女子の身長と幸福度との関係

幸福度 身長	非常に幸福	幸福	普通	不幸	非常に不幸	計	幸福点	標準偏差
高い	16	32	16	6	2	72	3.75	.98
普通	5	27	7	13	6	58	3.21	1.19
低い	11	18	9	4	0	42	3.88	.91
計	32	77	32	23	8	172	3.59	1.08

$r = -.066$ 有意差 高いと普通 $P < .001$
低いと普通 $P < .001$

第9表 女子の肥満痩身と幸福度との関係

幸福度 肥満・痩身	非常に幸福	幸福	普通	不幸	非常に不幸	計	幸福点	標準偏差
肥満	9	18	10	5	1	43	3.67	1.05
普通	20	42	19	12	5	98	3.61	1.09
痩身	3	17	3	6	2	31	3.42	1.10
計	32	77	32	23	8	172	3.59	1.08

$r = .110$ 有意差なし 肥満と痩身 $.1 < P < .2$

第11表 夫の死亡

夫の死亡 容貌	調査員 調人	夫死 の死亡	同	%
最上	26	1	4	
上	51	6	12	
普通	66	7	11	
下	21	0	0	
最下	8	0	0	

第10表 女子における愛嬌と幸福度との関係

幸福度 愛嬌	非常に幸福	幸福	普通	不幸	非常に不幸	計	幸福点	標準偏差
愛嬌あり	16	25	13	6	2	62	3.76	1.06
普通	14	40	8	12	3	77	3.65	1.06
愛嬌なし	2	12	11	5	3	33	3.15	1.10
計	32	77	32	23	8	172	3.59	1.08

$r = .278$ 有意差 愛嬌あり、愛嬌なし $P < .001$
普通、愛嬌なし $.02 < P < .05$

夫の死亡との関係で、容貌最上のもので、夫が死亡したものは一人であるから四％、上は六人で一二％、普通は七人で一一％に当り、下と最下に夫が死亡したものは一人もないことが注目される。このように夫が死亡したものは普通以上で、特に上の段階に一二％あることは俗にいう美人薄命に当たると思う。

第一〇表は愛嬌と幸福度の関係を示すもので、愛嬌ありが第一位（三七・六六）、普通が第二位（三・六五）、愛嬌なしが第三位（三・一五）で、愛嬌ありとなしとの間に危険率・〇・〇一以下で有意の差がある。愛嬌は容貌ではないが、人に好感を与えるので、相手の反応がよく、自分も自然と気持がよくなつて幸福度が高いものと思われる。

第12表 離婚

容貌	離婚		調査員	離婚	同	%
	調人	調査員				
最上	26	1	4			
上通	51	4	8			
普通	66	9	14			
下	21	0	0			
最下	8	0	0			

第13表 後妻

容貌	後妻		調査員	後妻	同	%
	調人	調査員				
最上	26	0	0			
上通	51	6	12			
普通	66	2	3			
下	21	2	10			
最下	8	0	0			

第一四表は再婚の調査で、最上と下及び最下にはなく、上に三名(六%)、普通に六名(九%)ある。下と最下にはないのは離婚者が一名もないので当然である。上には第一二表のように離婚者が四名あるので、うち三名が再婚して

第一二表は離婚との関係であるが、ここでも最上は一人で四%、上は四名で八%、普通は九名で一四%にあたるが、下と最下には離婚者が一人もない。このように下と最下には夫の死亡したものがなく、離婚者もないのは妻が夫に対する感謝からサービスがよく、特に夫の健康に注意するからであろう。

第一三表は後妻として結婚したもので、最上には一人もなく、上は六名で、一二%、普通は二人で三%、下は二人で一〇%あるが、最下には一人もない。婚期を逸したのも後妻として結婚できたことは幸せである。

第14表 再婚

容貌	再婚		調査員	再婚	同	%
	調人	調査員				
最上	26	0	0			
上通	51	3	6			
普通	66	6	9			
下	21	0	0			
最下	8	0	0			

り、普通は離婚者九名のうち六名が再婚している。離婚の理由は調査していないが、再婚して再出発できれば、過去の経験を生かして、よい人生を送っていくことができるであろう。

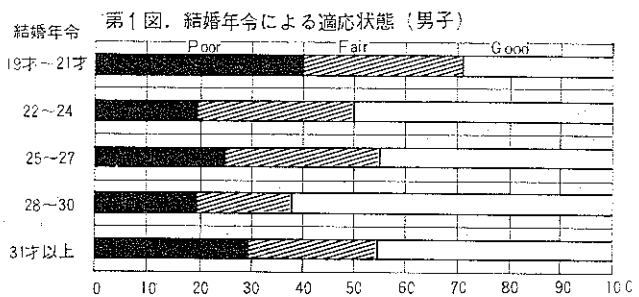
六、女子と職業、資格及び能力

以上のように美人必ずしも幸福でない、私は女子が職業をもつこと、少くとも万一の場合には自活するだけの力と資格をもっていることをおすすめる。宮崎女子短期大学が保育科、国文科、初等教育科、音楽科の四学科に、それぞれ二つ以上の資格を与えるのはそのためである。今日、女子は男女平等を謳歌しているが、そのためには女子が生活能力をもっていることが必要である。もし何らの生活能力ももたないで、夫だけに頼りきっていると、万一の場合には忽ち保護家庭となつて、生活保護をうけなければならない。夫の不業績、不品行、狂暴性などのため離婚を余儀なくされる場合もあるであろう。そのような時に、学問、技術、資格などが必要なのである。それがなければ暴力に甘んじ、一夫二婦または三婦になつても我慢しなければならぬことが起るであろう。それ故、男女平等の基礎として、私は女子が職業または自活の能力をもつことを希望する。文明社会では電気、瓦斯、水道などによって女性の家事は著しく時間が短縮され、夫が出勤し、子供が学校へ行った留守は長時間の余裕がある。その間、パートタイムで働らくもよく、学問や技術の修業も十分できる。若しまた機会に恵まれないう婚期を逸した場合などには職業で独立することができから無理をして下手な結婚をする必要はない。みなさんの中には未亡人もあり、結婚していい人もかなり多いときいている。結婚の相手は健康であること、性格(人柄)のよいことが第一である。しかもこの際、特に注意しておきたいことは学問技術と健康性格

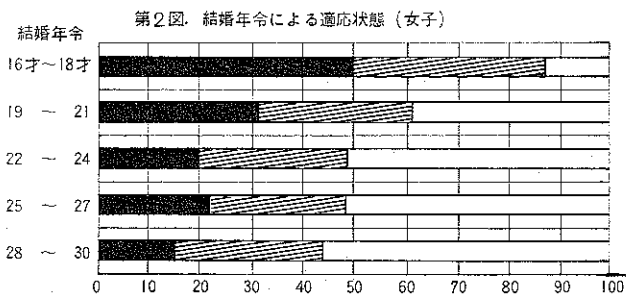
は加算ではなくて、掛け算であるということである。例え学問技術が一〇〇点でも健康性格が零点であれば、結果は零点となり、若しまた健康性格がマイナスであれば結果はマイナスになる。故に私は「下手な結婚はしない方がよい。職業で押し通せ」というのである。幸いにもみなさんは県の公務員である。よほどのことさえなければ立派に定年まで勤めて、一時金と年金を受けることができ、老後は保証されている。若しその間に健康で性格のよい男性に出逢えば結婚するがよい。私の知る知名の音楽家は三七才で結婚し、今はおし鳥夫婦といわれている。またあるピアノの演奏家はピアノに全生命を賭けているが、私が「先生は結婚なさらないのですか」ときくと、即座に、「私にはピアノが愛人であり、夫です」と答えた。ある茶道の先生は結婚して三人の子供まであったが、夫の不品行、不業績で離婚し、それから茶道に専念して、高い資格を与えられ、今では多くの弟子をもち、立派に独立している。パウル・ランディス (P.Landis) の調査によると、結婚についての十分な理解もなく、あまりに早く結婚すると不幸になりやすいといっている。

第一図と第二図はそれを示すもので、男子が一九才乃至二一才で結婚したものは、不幸 (poor) が四〇%、かなり良い (fair) が三二%で、良い (good) は二八%に過ぎない。最良の年頃は二八才から三〇才頃で、不幸が一九%、かなり良いが一八%、良いが六三%となり、良いが最も多い。そして三〇才を過ぎると、また不幸やかなり良いが多くなって、良いが四四%に減っている。また女子においては一六才乃至一八才で結婚したものは、不幸が五〇%で最も多く、かなり良い三七%、良いは一三%に過ぎないが、年令が高くなるにしたがって良いが多くなり、二八才から三〇才になると、不幸は一六%、かなり良い二八%、良いが五六%となって、良いが最も多くなっている。

第1図 結婚年令による適応状態 (男子)



第2図 結婚年令による適応状態 (女子)



これは本人に結婚の覚悟ができており、相手も少なくなっているので、喜んで結婚するからであろう。

次に知りあいまたは交際 (acquaintance) の期間は第三図が示すように、長いほどよく、六か月以内の知りあいまたは交際では不幸 (poor) が四八%、かなり良い (fair) が三二%、良い (good) が二〇%となっているが、知りあいまたは交際の期間が長くなるほど不幸が少なくなって、良いが多くなり、五年以上では、不幸一三%、かなり良い三五%となって、良いが五二%に増加している。この点から見ると、職場で長く知りあっていて、自然に結婚に近づくことも悪く

はない。しかし、とかく人前もはばからず恋愛して、大切な本務をおろそかにするようになりやすいので、職場結婚を禁じている会社も少なくない。すべて、ものには限度があることを忘れてはならない。

七、公務員の心得

最後に、公職についているものの心得を一通り述べてこの稿を終りたい。

第一に奇くも公職についているものは、公務を第一として私事を後にするのが大切である。特に今日のように男女平等である以上、「なるほど誰さんはよくやってくれる」と、同僚や上司から感心されるような役人にならなければならない。すべて役人は公僕である。

国民の税金によって養われていることを常に念頭におき、よく働かなければならない。よく働らく女性美しく見える。それで縁談が自然にできる場合も少くない。先ず県民に対して親切でなければならぬ。尤も役人も人間であるから時には気分が悪い日もあるうし、若い係長や課長に叱られたり、いや味を言われて、むしろくしゃしている時もあるであろう。しかし、そのようなことはあまり気にかけぬがよい。「ハイ、ハイ、すみません。よく気をつけます」と、あやまっておけばよい。それを他に転化して自分がよい子になったり、長々と言いわけをする必要はない。真相はそのうち自然にわかってくるからである。

第二は欠勤しないことである。少くとも出勤日は毎日定刻より少し早く出勤して、退庁時間までは用事がなくても必ずとどまっていなければならぬ。今、用事がなくても何時用事ができてくるかわからないからである。

第三には、自分の仕事を終って暇な時は、忙しそうにしている人に

「お手伝いしましょうか」と声をかけるがよい。隣りの人は忙しく働いているのに、自分の用事が終わったからとて男子職員とにぎやかに話したり、笑ったりするのはよくない。勿論仕事にはその人でなければできないこともあるうから無理に手伝わなくてよいが、誰にでもできる仕事も多いので、少なくともお手伝いの意志を伝えることは人間関係をよくする。

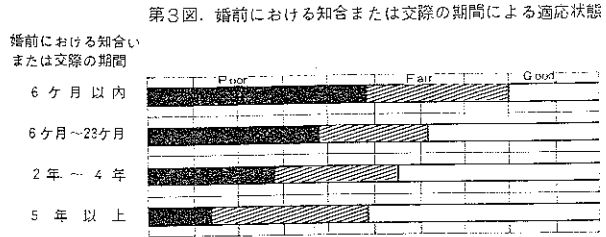
第四は身ぎれいにすることである。髪や洋服は年令相応にきれいにし、ジーンズや極端なミニスカートを避け、普通の服装、普通のお化粧で、何時でも時代の先端を行くことは避けるのがよい。年長者は若い人には気のつかぬ細かいところまで気をくばり、「この課にはあなたが居なければ困る」というようでないければならない。

第五は言語である。常に上品な言葉をつかい、礼儀を心得て、過度の敬語に流れず、野卑にも陥らぬよう努めて、公務員の気品を保たねばならない。

第六は絶対に怒らぬことである。怒って部下を叱りとばしたり、上司に反抗して怒声をかけたりすると、後でおわびして一応の和解はできても、必ず後に尾をひく、怒って喧嘩しても、後に残らぬのは親子と夫婦だけである。私が尊敬している郷里の名校長は退職後県会議員に二度立候補して二度とも落選した。これは在職当時の短気と気性の烈さが尾をひいていたのである。これに対して当時ばやとしていた教頭が校長となり、退職後県会議員に立候補した時にはみごと当選し、後に高血圧で自ら立候補をとりやめるまで連続数回当選し続けたのは、この人が部下に対して一度も怒らなかつたので、人に好かれていたからであろうと思う。

私は十三年間校長をしてから宮崎大学の教授に任用された。ここで今まで長であったものが部下になつたので、これまで部下に、こうし

第3図 婚前における知合または交際の期間による適応状態



でもらいたい、ああしてもらいたい
 と思って、部下がしてくれなかった
 ことを、今度は自分が進んでする時
 が来たと思って、年令を忘れて人の
 いやがる仕事を引きうけ、会議では
 居眠りをせぬよう煙草をふかして人
 の話をよくきき、議長が大学のため
 になる良い結論を出せるように終始
 協力した。後に自ら付属中学校長、
 学部長、図書館長などの管理職にな
 ってからは、寛容と忍耐をもって決
 して怒らずに過してきた。怒りは結
 局負けである。怒ればそれだけ人心
 を失うことを忘れてはならない。

八、女性の美は心の美

親切と上品さについては第四、第
 五で既に述べたが、私は過目テレビの座談会で次のような話をきい
 た。「東京の国鉄電車で若い女性が腰かけて乗っていた。そこへ脚の
 悪い老人が乗りこんでくると、その若い女性は、さっと席を立てて釣
 り革をもち、「どうぞ」と片手をさしのべた。老人が席について、す
 みません、ありがとう」といったら「いいえ」といって軽く頭を下
 げ、にっこりと微笑した。その上品さと色気（一種の魅力）は何とも
 いえなかった。ということであった。

私にもこれに似た経験がある。私が京都大学における日本心理学会
 に出席して、夕方近くになってから嵐山を見物に行った。観光客は帰え

り客ばかりであった。私は人が少なくなったベンチに腰かけて美しい桂
 川の流れと嵐山の紅葉を眺めていると、帰える気がしない。そこで弁当
 を買い、ベンチでそれを食べはじめた。そこへ中年の婦人が近よって
 きて、「お茶は如何？」といって紙のコップと魔法瓶をさし出した。
 「有難うございます」といってコップを受取ると、温いお茶を八分通
 りまで入れてくれた。老人が弁当を喉につまらせはしまいか、という
 心づかいからであろう。そして、「お静かなところが好きですか」
 という。まるで私の心を見通しである。よく見れば商家の奥さんのよ
 うであった。京訛りで二言、三言話し、コップにお茶をつぎそえてか
 ら軽く会釈して立去ったが、その茶のおいしかったこと、それよりも
 古都の女性の行きとどいた親切が身にしみた。

こういうところに女性の親切と上品さがあり、深く印象に残ってい
 る。職場の対人関係も女子職員がこのようであれば、課内に温い空気
 が満ち、定年になってもなお惜しまれると思う。すべてみなさんの職
 場へ来る人は、みな自分の家へ来たお客様のようになり、勝手をし
 らぬ人には懇切に教えてあげると、みな心から感謝するにちがいない。
 こうしてみると、要するに女性の美は心の美、もっと具体的にいえ
 ば、親切と誠意の美であるということになると思う。

参考文献

- 一、吉田熊次 系統的教育学 大正五、六、一〇
- 二、綾 哲一 女子における容貌の社会的心理学的意義
古賀先生還歴記念論文集昭和二七、一〇、五
- 三、綾 哲一 女性の顔 慶応通信 教育と医学
第八卷第六号 昭和三五、六、一
- 四、綾 哲一 既婚婦人の容貌と幸福度
官大心理学第一〇号 昭和三六、六、二〇
- 五、綾 哲一 容貌容姿の醜は劣等感に値するか
教育心理(文化科学社)
第九卷第九号 昭和三八、八、一五
- 六、綾 哲一 勤労女子青年の恋愛と結婚
第二四回九州心理学会紀要
昭和三七、一一、二二
- 七、綾 哲一 女子短大生の心理的特徴とその教育
宮崎女子短期大学研究紀要 第二集
昭和四四、八
- 八、P, Landis, Pshychology of Adolescence.
- 九、E, Spranger. Zur Psychologie des Jugendalter. 1924.